

# 狂言詞章における親から子への会話

——虎明本から虎寛本へ——

柏 本 雄 幸

## 一

狂言台本の定着期のものと言われている大蔵虎明本（一六四二年書写）と、狂言台本の固定期のものと言われている大蔵虎寛本（一七九二年書写）との比較研究には、多くの御論考がある。蜂谷清人氏は、虎寛本について「だいた江戸時代中期以降に一般に行われるようになった語形・用法も多く見られる」<sup>(1)</sup>と指摘されている。柳田征司氏は、「虎寛本狂言は、お礼のことは『有難い』と『忝い』とに關しては、室町時代の言語事象を示しているとは考えられず、明らかに江戸時代の新用法を混入させている」<sup>(2)</sup>と、虎寛本と江戸時代との関連を述べていられる。彦坂佳宣氏も、「固定期狂言の対称代名詞の待遇表現は、定着期のそれを単に固定化させて受け継いだのではなく、伝承時の口語の

影響を受け」たと論じられ、「その影響は主に江戸前半期の口語からのものであったと考えられる」<sup>(3)</sup>と具体的に「江戸前半期」との関連を指摘されている。

虎明本から虎寛本への過程に、狂言詞章の変化流動のあったことが、多く方によって指摘されている。本論文もそうした言語事象の一つとして、親から子への会話の変遷を見てみようとするものである。

## 二

大蔵流から見えていく。親子が登場する曲目で、対比の可能な会話を取りあげていく。

一、「金津地蔵」（虎寛本は「金津」とある）

(1) (虎明本) 親かなほうしをよび出して、だんかういたさ

う、かなぼうしいたかやい。

(虎寛本) 親 なうく金法師、おりやるか、居さしますか。

(2) (虎明本) 親 某は地藏を一体うけとつたが、汝をぢざう

になひてやらうと思ふ程に、いてくれひ。

(虎寛本) 親 そなたを呼出すは別成事でもない。片田舎の者に地藏を一体作てやらうと約束したほどに、わこりよ地藏に成ていてくれさしめ。

(3) (虎明本) 親 それは尤なれ共、あちへいて、人のないつ

がひをみて、にげてもどれ、もどつたらは、汝がほしひと云物をとらせうぞ。

(虎寛本) 親 夫は氣遣ひさしますな。能時分に連て戻らう。……を、何成りともほしい物をやらうが、何がほしいぞ。

(4) (虎明本) 親 やすひ事とらせう。はやうこしらへ。

(虎寛本) 親 先是へ寄て、身ごしらへをさしめ。

虎明本(1)の、親が子を呼び出す言い方の「いたか」は、「あるかやい、いたか」(虎明・末広がり)のように、大名が太郎冠者を呼び出す言い方と同様である。虎明本の親子

の間柄は、主従関係に準じるものと言えよう。同じく、虎明本(3)の「とらす」も、「大黒れんがのおもしろさに、数のたからを入おきたる袋をなんじにとらせけり」(虎明・大黒連歌)のように、上位者から下位者への行為をことさらに強調したものである。

反対に、虎寛本の方の「おりやるか、居さしますか」は、○女共に談合いたさひではならぬ程に、よび出さう。是のはうちにおりやるか。(虎寛・河上)

○イヤ、なうく是のは内に居さしますか。(虎寛・右近左近)

のように、夫が妻を呼び出す時の言い方である。つまり、軽い敬意の敬語による親愛表現なのである。同じく虎寛本の「いてくれさしめ」「身ごしらへをさしめ」の「しめ・さしめ」であるが、ロドリゲスは、

「甚だ下品な言い方であつて、その中に非常に尊大ぶつた氣持を含んでゐて対手を甚だしく輕蔑するもの」<sup>(4)</sup>

とするが、狂言では、軽い敬意による親愛表現と考えられる。<sup>(5)</sup>また、「居さしますか」「氣遣さしますな」の「します・さします」も、尊敬表現であるが、狂言では親愛表現とみなされている。<sup>(6)</sup>

虎明本の親から子への会話は、敬語を用いず、主従関

係に準じた間柄を示している。反対に、虎寛本の方は、軽い敬意の敬語を用いた親愛表現になっており、夫婦関係にも似たやさしい間柄であることを示すものである。

## 二、「首引」

(1) (虎明本) <sup>親鬼</sup> やひひめ、はやうこひ、よひ事が有ぞ。

(虎寛本) <sup>親鬼</sup> イヤ、なうく姫、おりやるか、居さしますか。

(2) (虎明本) <sup>親鬼</sup> おれが子共覚ぬ事を云。あれもがてんじやほどに、くひならひにいきものをくへ。

(虎寛本) <sup>親鬼</sup> そちは身共が娘程にも無。卑怯な事をいふ。夫では喰初のせんがない。どれから成共かみついて喰しめ。

(3) (虎明本) 該当箇所ナシ

(虎寛本) <sup>親鬼</sup> なうくひめ、今度は首引をせうといふ。またあれへお出やれ。

虎明本と虎寛本の「くへ↓喰しめ」の対比は、触れないでおく。虎寛本(3)の「お出やれ」について触れておくと、○うちにおりやるか、く、是へおでやれ。(虎明・猿

座頭) △夫↓妻▽

○やれくようおてやつた、いつもよりも一段きれいなが、どこへぞゆくか。(虎明・引敷聲) △教え手↓聲▽  
○つ、と御出やれ。／心得ました。(虎寛・今参) △太郎冠者↓新参者▽

○や、召と有る。／其通りじや。／急で御出やれ。(虎寛・がんかりがね) △百姓↓百姓▽

「お出やれ」は、対等か、やや下位の者に用いられている。軽い敬意による親愛表現ということができよう。「首引」を通して、虎明本と虎寛本との間には変化があり、虎寛本がやさしい表現を志向していることがわかる。

## 三、「二人袴」

(1) (虎明本) <sup>親</sup> 今日日がよひに依てしうとのかたより汝にむこいりをせいといふてきた。其こしらへをして、急でゆけ。

(虎寛本) <sup>親</sup> けふは最上吉日じやと有て、舅殿の方から聲入をせいといふて来た程に、身こしらへをして早う行しめ。

(2) (虎明本) <sup>親</sup> もんぐわいて、こしらへさせう。こひく。

(虎寛本) 親さあ〜おりやれ〜。

(3) (虎明本) 親そうじておのれは、あはうじや程に大体のじぎをいふたらは、むさとしたる事をいひをるな。

(虎寛本) 親扱あれへ居た成らば、必身共が来たと云事をおしやるな。

(4) (虎明本) 親身共は案内をいふほどに、汝はそれではかまをきよ。

(虎寛本) 親某は案内を乞う程に、そなたは袴を出いて着さしめ。

(5) (虎明本) 親はかまなひ程に、其はかまをこせひ。

(虎寛本) 親袴が無い。其袴をおこさしめ。

「二人袴」も「金津地藏」や「首引」と同様のことが言える。虎明本が無敬語表現であるのに対して、虎寛本は、親愛表現となっている。虎寛本(3)の「おしやる」については、

○なふ、そなたは何事をおしやるぞ。(虎明・右近左近)

△妻↓夫↓

○やら、そなたはきこえぬ事をおしやる。(虎明・右近左近) △妻↓夫↓

○エ、またうろたへた事を仰らるゝ。是は内で御ざるは。(虎寛・右近左近) △妻↓夫↓

○イヤ、こなたはいな事を仰らるゝ。(虎寛・右近左近) △妻↓夫↓

○是はいかな事。和御料迄其様な事をおしやる。(虎寛・右近左近) △夫↓妻↓

○を、そなたのおしやる通り、そこは口きゝに有り、地頭殿は手一ぱいにする。(虎寛・右近左近) △夫↓妻↓

○明日かはらへ来いとおしやつたに依て、夫故参た。

(虎寛・河原太郎) △夫↓妻↓

虎明本では「おしやる」は、妻から夫へ用いられているが、虎寛本では、夫から妻へ用いられている。虎明本の「おしやる」には、「仰せらるる」が対応している。虎明本の「おしやる」は、尊敬表現であるが、虎寛本の「おしやる」は、親愛表現である。

四、「乞聲」(虎寛本にはこの曲は所収されていない。茂山家本を底本とする小学館の日本古典文学全集「狂言集」の「貫聲」と対照させた。現行曲である。)

(1) (虎明本) 親おごうもどつたか。

(茂山家本) 親 エイ、おごうおりやつたか。

(2) (虎明本) 親 ようこそいとまをとつてきたれ。

(茂山家本) 親 堪忍して元へ戻らしめ。

(3) (虎明本) 親 誰が何と云共、もどすまひぞ。氣遣ひすな。

(茂山家本) 親 アアこれ、まづお待ちちやれ。

(4) (虎明本) 親 よふこそおもひきつたれ、さすがにおれが子じや。

(茂山家本) 親 それほどまでに思ひつめさしましたことならば、身共もはや留めはせぬ。

親子と言っても、子どもは、成人した大人である。夫婦喧嘩をして戻って来た娘に対して、虎明本は、よくぞ決心したと誉めており、茂山家本は、考え直して、元に戻るよう説得している。したがって両者の会話は、うまく対応したものになっていない。それにしても、虎明本は、成人した娘であろうと、無敬語の表現であり、茂山家本は虎寛本同様に親愛表現となっている。茂山家(3)の「お待ちちやれ」については、

○何時成共見せておまさう。先、夫にお待れ。(虎寛・

末広がり) △売手→太郎冠者▽

○ちと御まちちやれ。／何時じや。(虎寛・三本の柱)

△太郎冠者→次郎・三郎冠者▽

○夫を見てをしへておまさう。先夫におまちちやれ。(虎寛・包丁髯) △教え手→髯▽

「お待ちちやれ」は、太郎冠者と次郎冠者のような対等の間柄、あるいは、都の売手から田舎者といったやや下位の者へ用いられている、親愛の表現とみなすべきであろう。

五、「包丁髯」

(1) (虎明本) 親 おごうきたか。

(虎寛本) 親 ようこそおりやつたれ。

(2) (虎明本) 親 かうまづとをれ。

(虎寛本) 親 先是へ通らしめ。

子どもは、「乞髯」と同様に夫を持つ成人した娘である。会話も「乞髯」と同様に、虎明本は「きたか」「とをれ」と無敬語表現であり、虎寛本は「おりやつた」「通らしめ」の親愛表現である。

親子の登場する曲目は、以上のほかに、「此丘貞」と「いろは」がある。「此丘貞」は、虎寛本で親子の設定となつ

ているが、虎明本では兄弟の設定となっているので、比較しなかった。「いろは」は、次のようになっている。

六、「いろは」

(1) (虎明本) 親 かなぼうしあるか。

(虎寛本) 親 なうく金法師、おりやるか、居さしますか。

(2) (虎明本) 親 手ならひをすれば、しろひくろひをしらねはならぬが、なんぢはしつたか。

(虎寛本) 親 手習をするには白い黒いを知らねば成らぬが、知つてゐるか。

(3) (虎明本) 親 ゑひもせず京とよめ。

(虎寛本) 親 ゑひもせず京と読め。

(4) (虎明本) 親 思ひ出いたやれ。某がくちまねをせい。

(虎寛本) 親 是からは某がいふ様する様に口真似をせい。

(5) (虎明本) 親 一だんよひ、もうおけ。

(虎寛本) 親 もう能い。行て休め。

子と呼び出す言い方が、虎明本「あるか」に対して、虎寛

本が「おりやるか、居さしますか」になっている。しかしそのほかは、両者とも無敬語表現となっている。虎明本は、一貫して子には無敬語表現であるから、別段変つたものではない。虎寛本が意図的に無敬語表現にしたということである。意図は、親が子に教えるということにあると思う。教え授けるといふ上下関係が強調されたものと思う。

虎寛本において、親から子への会話が類型的に親愛表現になっているのではない。場面によって親愛表現にならないこともあった。狂言台本の固定化の問題で、狂言詞章の形式化・類型化が指摘される。虎寛本の親から子への親愛表現が類型的でないということは、これが詞章レベルのみの問題ではなく、現実の言語事象を反映していると考えるのである。江戸末期に成立した大蔵虎光本(文化十四・一八一七年書写)になると、

○ 親 のふくかなぼうしおりやるか、いさし舛か。

○ 親 去手手習をするにハ白黒イを知ねバ成ぬが、白黒イを知て居さし舛か。

○ 親 是を教ておませう。

○ 親 ゑひもせず京とおしやれ。

○ 親 能々何ことをおしやる。

虎寛本ではまだ無敬語表現であったが、親愛表現となつて

いる。その場面と関係なく、親から子への会話が類型化、形式化しているのである。虎光本と対比させることで、虎寛本の親から子への親愛表現が生きた言語事象であったことがうかがえるのである。

### 三

大蔵流の分家である八右衛門派の狂言台本について見ていく。

宮島歴史民俗資料館に「伊藤源之丞本」なる狂言台本が所蔵されている。一九八八年から八九年にかけて米子工業高等専門学校の水井猛氏が翻刻され、解説を付して出版された。<sup>8)</sup>水井氏によると、伊藤源之丞は、宮島出身で、宮島の杜人であり、宮島狂言師であった。若い時に江戸に出て狂言の勉強をしたのであろうが、その時書写したものが「伊藤源之丞本」である。宝暦年間（一七五一—一七六三）であろうと推定されている。台本の系譜は、虎明の弟清虎の流れを踏む大蔵八右衛門派の系統である。水井氏によると、「現在発見されている八右衛門派のまとまった最古の台本として貴重なものである」とし、虎明本と虎寛本の「中間に位置する台本」と位置づけられている。台本定着期の古本系の要素を有すると考えてよいようである。

一方、これを対比させるものとして、大蔵虎光本を採用した。八右衛門派の台本であるが、伊藤源之丞本の書写年代より一時代後の文化十四年（一一八一）の成立である。内容としては、虎寛本と殆ど変わらないと言われている。台本固定期の、つまり正本系に所属する台本のようなのである。

#### 一、「金津」

(1) (伊藤本) 親 やいやい金法師居るか。

(虎光本) 親 のふかなぼうしおりやるか、いさし舛か。

(2) (伊藤本) 親 汝は地蔵に成て田舎へ居てくれい。

(虎光本) 親 そなたは地蔵ニ成て田舎へいて呉さしめ。

(3) (伊藤本) 親 地蔵に成たならバ汝がほしい物を何成ともやるぞ。

(虎光本) 親 又何成共ほしい物をかふておまするに依て何卒いて呉さしめ。

伊藤源之丞本は「居るか」「やるぞ」と無敬語表現である。それに対して、虎光本は「おりやるか」「おまする」の親愛表現になっている。

二、「首引」

(1) (伊藤本) 親 苦しうない。急でいてくゑ。

(虎光本) 親 能若者をとらへて置た程二早ふいて喰しめ。

(2) (伊藤本) 親 やいやい姫、あれゑ出てすねおしをせひ。

(虎光本) 親 のふのお姫、あれへ出て腕押をさしめ。

(3) (伊藤本) 親 やいやい、此度はう手おしをせうと云。あれゑ出よ。

(虎光本) 親 今度は臍押をせうと言。あれへお出やれ。

「首引」においても無敬語表現と親愛表現とが、きれいに対応していることが知られる。

三、「二人袴」

(1) (伊藤本) 親 ヤイヤイ、誰か居るか。

(虎光本) 親 のふのおおりやるか、いさし舛か。

(2) (伊藤本) 親 急で行。

(虎光本) 親 是非共行かしめ。

(3) (伊藤本) 親 ヤイ、おのれハあはじや処で先ゑいてむさ

とした事を云な。

(虎光本) 親 あれへいたらバ、構て某が来たとおしやるな。

四、「包丁聲」

(1) (伊藤本) 親 やれやれ、能こそ来たれ。

(虎光本) 親 よふ社おりやつた。

親子の登場する曲目を四曲対比させたが、いずれも無敬語表現と親愛表現とがきちんと対応していた。そして、伊藤源之丞本は、親から子への表現に、古本系の様相を残していた。伊藤源之丞本の成立が宝暦年間の一七五一年から一七六三年頃までと推定されている。年代的には一六四二年書写の虎明本よりも一七九二年書写の虎寛本に近いことになる。にもかかわらず古本系を残している。現実の演出はどうであつたか知ることはできない。しかし台本としては、虎寛本出現前の台本は、古本系に近い台本が用いられていたのではないかということをうかがわせる。

四

和泉流について見ることにする。和泉流の祖本と言われている天理本の「狂言六義」(宝永年間・一六二四～一六四三年頃の書写)と、古典文庫所収の「狂言集和泉流」



〔江戸末期から明治初期にかけての成立〕 および「狂言集<sup>⑩</sup>」とを対比考察した。

一、「金津地蔵」

(1) (天理本) 親 金法師、居るか。

(古典文庫本) 親 なふく金法師おあるか。

(2) (天理本) 親 ととが身上が成らいで、朝夕を送りかねる。

とかくそちを売つて、ともかうもせうと云。二人の親の談合じや、いやと思うか。

(古典文庫本) 親 と、が身上がならぬに依て、そなたを

売て兎もかうもせうと、二人の親の談合ぢやが、いやと思はしますか。

(3) (天理本) 親 やら嬉しや、さらば語らう。……地蔵を一体、請け取つた、そなた地蔵になつて、行てたもれと云

(古典文庫本) 親 扱もく迷惑な事ケナゲな事ワトモをおせある、是非に

及ばぬ、さらば語らう、…仏を一体請取た、夫に付てそなたを頼む程に何卒地蔵に成ていておくれあれ。

(5) (天理本) 親 まづ、地蔵の拵へをせう、こちへおりやれ。

(古典文庫本) 親 さあく是へ来さしませ。

天理本の「狂言六義」は、「居たか」「思ふか」のように無敬語表現があれば、「行てたもれ」「おりやれ」のように軽い敬意表現もみられる、親から子への表現には古本系よりもむしろ固定期台本に近いものを持っている。

二、「貴婢」

(1) (天理本) 親 よふおじやつたと云て、

(古典文庫本) 親 エイおなあよう社おりあつたれ。

(2) (天理本) 親 皆酒の上での事じやほどに、急ぎ往なしませ。

(古典文庫本) 親 酒の上の事ぢや、わるい事はいはぬ、機嫌を直してすぐにいなしませ。

(3) (天理本) 親 酒に酔ふては、よろづ覚えぬ物じや程に、急ひでお帰れと云、

(古典文庫本) 親 そなたの為にわるい事はいはぬ、兎角機嫌を直していなしませ。

(4) (天理本) 親 それならば是非に及ばぬ、往なせまひほどに、心安う思へと云

(古典文庫本) 親是非に及はぬ、氣遣ひおしあるな。いなしはせまい程に心安う思はしませ。

成人した娘という事情があるかもしれないが、「天理本狂言六義」は、固定後の台本である古典文庫本と全く同様の軽い敬意表現である。虎明本に見られなかった事である。宝永年間の書写と言われているが、新しい要素もあるのではないかと思う。

### 三、「首引」

(1) (天理本) 親 姫居るか<sup>と</sup>云て呼び出す

(古典文庫本) 親 やい／＼姫ちやつとこい／＼。姫こい／＼。

(2) (天理本) 親 父が子が、そのやうな事を云うものか、

食へと云

(古典文庫本) 親 父が子の様にもにない事をいふ、はやう／＼。

(3) (天理本) 親 腕押しをせい。

(古典文庫本) 親 氣支はない程に腕押しをせい。

### 四、「いろは」

(1) (天理本) 親 金法師居たか。

(古典文庫本) 親 金法師あるか。

(2) (天理本) 親 やれ／＼口から先へ、生た事を云、

(古典文庫本) 親 燈心の出るを見た事もあるまいに、よふいふた。

(3) (天理本) 親 ゑひもせず、京と言へ。

(古典文庫本) 親 ゑひもせず京といへ。

「二人袴」は、対応する箇所が欠けていたので省略した。「此丘貞」は、虎明本同様に兄と弟の設定になっていたので省略した。「いろは」は、古典文庫本においても無敬語である事は、大蔵流にも同じようになっていた。問題は「首引」である。古典文庫本においても無敬語表現である。「狂言集成」を参照したが「姫来い／＼」「あれへ行て喰はい／＼」「あれと勝負に腕押しをせい」と無敬語表現であった。意図があつての事と思う。鬼との関係も考えられるが、よくわからない。

和泉流について言えば、固定後の台本では、子への表現に親愛表現が基本となっている。古本系の天理本「狂言六

義」では、子への表現に固定期台本に近いものがあつて、古本系と見なすには問題があるように思つた。

## 五

「狂言記」について見ていく。「狂言記」には、『狂言記正篇』『狂言記外五十番』『続狂言記』『狂言記拾遺』<sup>①</sup>の四種類が含まれている。北原保雄氏の「解説篇」からの孫引で恐縮であるが、池田廣司氏は、「狂言記」四種の性格を次のように述べておられる。

1 『狂言記正篇』は、固定前の大蔵流や大蔵流の配下にあつて歌舞伎との交流のあつた群小諸派の町風の台本によつたものといえるのではないか。

2 『狂言記外五十番』は、筋立てやセリフもかなり自由であつた固定前の大蔵流や大蔵の弟子であつた三宅家の町風の台本に拠つたものではないか。

3 『続狂言記』と『狂言記拾遺』とは、群小諸派から遠ざかり、固定あるいは刪定された大蔵流を反映したある町風の台本によつたものではなからうか。このように性格づけされている。私が興味を持ったのは、『狂言記正篇』と『狂言記外五十番』とが、「固定前」の大蔵流関係の台本によるということと、『続狂言記』と『狂

言記拾遺』とが、「固定あるいは刪定された」大蔵流の台本を反映しているということである。「固定前」と「固定後」とがどのように関係してくるかに興味がある。

一、『狂言記正篇』より

「貫髻」の一曲のみである。

(1) 親 さいたやうなこゑがするが、誰もでぬか。や、おなは、  
なんとしたきたぞ。

(2) 親 なにといふぞ。子中子をなしたる中を、でるぞひくぞ  
といふ事はあるまひ。一時もおかぬ。おかへりやす。

(3) 親 いやそれほどにおもふならば、まづはいれ。

(4) 親 我はしかといぬまひといふさか。かまひておやに恥を  
かかすなよ。

『狂言正篇』の「貫髻」を見ると、成人した娘であつても、親から子への会話は、無敬語表現である。一箇所、「おかへりやす」の言い方が出てくる。助動詞「やす」は、『狂言記正篇』では、夫から妻へ、あるいは、仲人から髻へと、下位の者に対する親愛の表現となつて<sup>⑬</sup>いる。親愛表現にうつかりしてしまつたということかもしれない。

二、『狂言記外五十番』より

『狂言記外五十番』には、「首引」「伊呂波」「金津地蔵」の三曲がある。

(1)「首引」

① 親 来い来い。よい食物がある。あれあれ、食ひはじめに食へ。

② 親 尤ぢや尤ぢや。さあさあお姫、腕押せい。

③ 親 姫、すねおしせい。

④ 親 姫、首引せい。

(2)「金津地蔵」

① 親 悴を地蔵にこしらへてやらうと思て、受取り申した。かな法師ゐるか。

② 親 汝を地蔵にこしらへてやらうと思ふ、行てくれい。

③ 親 やうやう昨日約束の時分ぢや。来い来い。

④ 親 それは、見あはせて、そつと逃げて来い。

⑤ 親 これこれ、腰かけて錫杖を持つて居よ。

『狂言記外五十番』については、例外なく、きちんと無敬語表現となっている。

それでは、固定後の台本と性格づけられている『続狂言記』と『狂言記拾遺』はどのようなであろうか。親子が登場

する曲目は、『狂言記拾遺』に「此丘貞」が一曲あるのみであった。

三、『狂言記拾遺』より

(1)「此丘貞」

① 親 それかし世悴(せがれ)を売人持てこさるか、…これゑつれて参り名をつけてもらおふと存る。先よひ出して申付ふ。のふのふかなほうしおりやるか。

② 親 いやいやけふは日もよい。同道いたそふ。ささへ用意しやれ

③ 親 さあさあをりやれ。

④ 親 唯今からわこりよもおれうさまにあやかつて仕合せれ。

⑤ 親 案内をいわふ程に、それにまたしめ。

⑥ 親 畏てこさる。のふのふかなほうしあれへ出させませ。

『狂言記拾遺』所収の「此丘貞」は、このように親愛表現になっている。「此丘貞」の一曲しかないことが残念である。それでもあえて言えば、『狂言記』においても固定前と固定後では、親から子への表現に変化があった。固定前は、大蔵虎明本と同様に古本系の無敬語表現であった、そして固定後の台本は、大蔵虎寛本と同様に親愛表現になっていたということである。

なお、鷺流については、資料不足で比較ができなかった。朝日古典全書に鷺健次郎賢通書写本（安政二年・一八八五）が所収されている。その賢通本の「金津地蔵」に

親「……いやよい事を思い出した。某は幼少の悴を持つてござる。平常遊んばかりゐて何の役に立ちませぬ。

これを地蔵にこしらへ、売つてやらうと存ずる。なうなう最前も言ふ通り、何事を申されても必ず物を言はしますな。……親「それは氣遣ひをさしますな。朝夕の供御は言ふに及ばず、折々は菓子なども供へらるるやうに言はう程に、必ず物を言はしますな。」

固定後の台本である賢通本は、親愛表現になっている。一読して氣付かれると思うが、文章の「売つてやらうと存ずる」と「なうなう最前も言ふ通り」との間に長文の脱落がある。悴を呼び出し、地蔵を引き受けた事情、悴への説得「最前も言ふ通り」とある氣付かれないための諸注意などが脱落している。頭注で脱落部分の補充がなされている。

その補充に『鷺伝右衛門保教本（元禄末から正徳年間・一七〇〇年前後から一七一六年頃の書写）が用いられている。やや長いけれども、重要な事柄なので全部を引用する。

「と楽屋に向ひ」金法師居るか用がある。早うおりやれ。  
シテ 某をよばせらるるは何事でございる。アド いや別の事

でもなひ。田舎の人が来て、地蔵を誂へらるる。所で身共が請取つて山越も沢山に貰うた、それについてちとの内、そちを地蔵のていにこしらへてやらうが行かうか。

シテ おれはいやでござる。アド いやちや。シテ とと様やかか様の傍を離れて行く事はなりますまい。アド いや身共が同道して、行く先へいても、色々そちが数奇になる事ぢやげな。ひらに行け。シテ それならば行きませうが、とと様もそこにござるか。アド なかなかそこに居る。シテ 饅頭もくれませうか。アド なかなか饅頭も何も好むものを振舞ふよ。シテ それならばゆきませう。アド さらば爰へきて拵へい。

「おりやれ」が一箇所あるが、そのほかは無敬語表現となっている。鷺伝右衛門本の子へ会話は、無敬語によるものになっていたと推測される。こうしてみると、鷺流においても、伝右衛門本のように子への会話が無敬語という古本系と、賢通本のように子への会話が親愛表現という固定後の正本系との対比変化のあつた可能性がうかがえるのである。

## 六

狂言詞章の親から子への会話に変化流動のあつたことを各流派について触れて来た。そしてその変化が、台本の固

定前と固定後にかかわっていることを述べた。この変化が単なるセリフの類型化、形式化ではないとすれば、どのような言語事象に支えられていたのであろうか。

ロドリゲスは、「日本大文典」で次のように述べている。

○動詞の語根の後に *Au* (あり)、*Aru* (ある) を添へたものは、主人が尊敬する召使と話し、親が成人した子供と話し、或いは伴天連がいくらか敬意のもたれる年少の「同宿」(*Dōjucu*) とが、我々とは従属関係のない賤しい者共とかと話す場合には使ふけれども、敬意は極めて低い。例へば、*Quattaca?* (食ひあったか)、*Cagatuca?* (書きあるか)、*Quiquanuca?* (聞きあるか)、等<sup>(14)</sup>

ここでは、「親が成人した子供」へ軽い敬意の語「あり」を用いることを述べている。天草版平家物語で、母二位が子宗盛に語っている部分などがそれであろう。

○はや内侍所かへし入れ奉って、重衡助けてお見せあれ。世にあらうと思ふも子供のためぢや。われを助けうと思ひあるならば、重衡をま一度お見せあれと泣かれた。

#### (四ノ十二)

「あり」だけでなく、「お見せあれ」などの尊敬表現も見られるが、子宗盛というよりも、内大臣であり、平家一門の頭領としての尊敬が強いのであろう。狂言詞章の、子への

親愛表現と、ロドリゲスの言う「成人した子供」への尊敬表現がつながっているのであろうか。「成人した子供」とあるように、それはあくまでも上位に置いた表現である。狂言詞章の親愛表現は、幼少、成人に関係なく我が子ゆえの愛情表現であるように思う。むしろ、ロドリゲスの次のことが、室町時代の、親から子への会話をよく表していると思う。

○いの国語に於いて、*Yūta* (言うた)、*cagu* (書く)、*Xitua* (知った)、*Narō* (習ふ) などのやうな単純動詞を用ゐて話すことは優越及び尊大を意味してゐて、かかる動詞を使つて話す対手の人とか、その座に居る人とかを軽蔑することになるのである。主人が召使と話すとか、親が子供と話すとか、話すのに礼儀を保たない極めて親しい間柄か、下々の者同志かが話す時の言ひ方である。<sup>(15)</sup>

「主人が召使と話す」時とか、「親が子供と話す」時には、単純動詞を用いる、それは話し手の「優越及び尊大を意味してゐる」と言うのである。これが室町時代あるいは江戸初期の、親から子への会話であつた。

○その束ねを取つて数多を一つにして、縄を以つて思うさま堅う巻き立てて、子供に渡いて、「これを折れ」

と言う。(天草版イソボ「百姓と子供の事」)へ父↓子↓

○野牛の母、草を喰いに野に出づる時、子供に言い置くやうは、「この穴の戸を中よりよう閉ぢて居よ。何と外より呼び叩くと言うとも、我が声、又このように叩かずは、粗忽に開くな」と言うて出た。(天草版イソボ「野牛の子と狼の事」)

○やあ御前、これをもつて念仏を申し、父御前と一つ所に生まれよ」とおほせらるれば、(天草版平家物語・四ノ二六)へ母北の方↓十二歳の子・六代↓

○ある人、子をしてらへあけ、きやうをよめ、かくもんにせいをいれよと、きようくんすれとも、一ゑんせうゐんせぬ。(きのふはけふの物語35話)

○窮貧の者ありて、五つ六つなる子にむかひ……指にて錢のまねをし、しきりに「千代松よ、ゆふべから教へたる事をいへ」といふ時、(醒睡笑一・12話)

○かの子既に十五になる時、右の後家銀子五百目子にやり、「いづくへも出よ」といふ。(醒睡笑四・26話)

いずれも、親から子への会話は、無敬語、つまり単純動詞が用いられている。これが当時の一般的な子への言い方とすれば、虎明本の無敬語表現は、室町時代から江戸初期の言語事象を反映していると言うことになる。

親愛表現という言語事象はいつ頃から見られるようになるのであろう。

「浮世風呂」(文化六―文化十年・一八〇九―一八一三)などには、

○兄さんや、ころびなさんなよ。能く下を見ておあるきよ。(前編の上)へ父―男の子↓

○サアサア、坊や這入ませうよ。ヤレヤレ、けつかうなお湯だぞ。……あついことがあるものか。弱いことをいひなさる。(三編の下)へ母↓子↓

現代と同じような親愛の命令表現がみられる。しかし、これらが参考にならないことは言うまでもない。江戸前期から江戸中期あたりから見出さなくてはならない。その点が十分に調べ切れていない。近松門左衛門(一六五三―一七二四)の世話浄瑠璃に見当を立てて調べると、次のな諸例が見られた。これはその一部である。

○あれ聞きや、人が来る、出たもと、手を取って引出す。……こりや、ま一度こちらを向きや。山川で怪我しやんな。(丹波与作待夜の小室節)へ母親↓子↓

○これこれ源之介戻りやつたか、めでたいめでたい。(夕霧阿波渡)へ母親↓子↓

○いとしや、いかう肌薄な。路錢に尽きて脱ぎやつたの。

……かならずかならず悲しいこと、聞かせて泣かせて  
たもんなや。(大経師昔暦) へ母親↓成人の娘↓

○おちよ、泣かずとここへおぢやいの。まだおれが怖い  
か。(心中宵庚申) へ姑↓嫁↓

子どもへの会話が親愛表現になっている。問題なのは、母  
親の例ばかりである。父親の子への会話が親愛表現になっ  
ている例は見当らなかったが、

○喧嘩は降物。<sup>かたが</sup>わごりよたち、もしものことがあつたり

とも、いかな九文きなかでも、堪忍ばし召さるなど、

真顔に言ひしも殊勝なり。(五十年忘歌念仏) へ父親

↓娘↓

父親の例をやつと一例見つけた。十分に調査すれば、まだ  
まだ見出せるものと思う。江戸時代前期あるいは、江戸時  
代中期の早い時期に、親から子への会話が親愛表現が用い  
られることがあつたとすれば、狂言詞章の変化は、そうし  
た口語の変遷の反映であつたと言ふことができよう。

それは置いておいても、狂言詞章の、親から子への会話  
に変化があり、その変化が狂言台本の固定前と固定後にか  
わつていることは確かなようである。今後の調査に待ち  
たい。

注

- (1) 「虎明本から虎寛本へ——語形・用法の変遷とその史的位  
置についての試論——」(『狂言台本の国語学的研究』笠間書院)
- (2) 「大藏流狂言に見える、お札のことは『有難い』と『忝  
い』について」(『国語学』67、後に『室町時代語 基本語詞  
の研究』に所収)
- (3) 「大藏流狂言『虎明本』から『虎寛本』——その待遇表現の  
変化——」(『国語学研究』14号)
- (4) 「土井忠生先生訳『ロドリゲス日本大文典』六〇頁
- (5) 「次手に子どもがのをよば、つてくれさしめ」(虎明・  
目近篋骨) へ次郎冠者↓太郎冠者↓
- はやうつれていて、其水をくれて、わかうなひてくれ  
さしめ。(虎明・薬水) へ祖父↓孫↓
- イヤく誠の鈍太郎が仕合よう戻たに依て、早う明て  
くれさしめ。(虎寛・鈍太郎) へ夫↓妻↓
- このように「しめ・さしめ」は、対等か、やや下位の者で、  
親しい間柄に用いられている。
- (6) 『時代別国語大辞典室町時代編』の「します」の項参照。
- (7) 古典文庫本によつた。
- (8) 永井猛・高橋修三校訂『宮島大藏流 伊藤源之丞本上下』  
によつた。
- (9) 天理図書館蔵本を翻刻された北原保雄・小林賢次著『狂



言六義全注』勉誠社刊を用いた。

- (10) 能楽書院発行の複製本を用いた。序言によると、「底本としては、寛政から慶応に至るまでの古写本を用ゐ」たとある、江戸の中期後期に該当する。

- (11) 『狂言記正篇』、『続狂言記』、『狂言記拾遺』の三冊について、北原保雄氏他の編著になる勉誠社出版のものを用いた。『狂言記外五十番』は、有朋堂文庫本を用いた。

- (12) 『狂言記の研究下翻字篇索引篇』の「第二部 解説篇」一〇頁

- (13) ○おれは地頭殿へゆくほどに、ようるすをしやす。(内沙汰) △夫↓妻↓

○地頭殿は太刀をはいていさつしやる。まづ此太刀をはきやす。(内沙汰) △夫↓妻↓

○まだほどとおうはゆくまひ。急でおつかきやす。(法師物狂ひ) △仲人↓簪↓

- (14) 土井忠生先生訳『ロドリゲス日本大文典』五八二頁  
(15) 同書五九八頁